

言語障害のリハビリテーション

Rehabilitation of verbal disorders

言語障害に対するリハビリテーションは、回復期リハビリテーションにおける失語症や高次脳機能障害、小児病院における小児脳損傷者や療育の現場における神経発達症、進行性の認知症への対応など、子どもから高齢者まで多岐にわたります。

本特集では、さまざまな分野で言語障害の支援にかかわっている専門家に、言語障害のリハビリテーションの現状と課題を解説していただきました。

失語症の評価と回復期リハビリテーション 1293

沖田 啓子 氏ら

回復期でのリハビリテーションは機能改善が大きくみられる時期であると同時に、退院後の生活を見据えたかかわりを求められる時期でもある。本稿では、失語症と失語症によるコミュニケーションの特徴を踏まえ、回復期リハビリテーション病棟での取り組みについて、データや症例を交えながら、機能面へのアプローチと、退院後を想定した活動・参加、言語環境へのアプローチについて紹介している。

認知コミュニケーション障害の評価と介入 1301

廣實 真弓 氏

高次脳機能障害と併発するコミュニケーション障害は、認知コミュニケーション障害 (cognitive communication disorder : CCD) と呼ばれる。CCD の原因は交通事故、転倒、スポーツによる脳しんとう、頭部への殴打、脳血管障害、神経疾患、心停止などである。本稿では医療職、CCD の当事者、家族、および支援者間で CCD の評価や介入に関する情報を共有する目的で、後天性脳損傷による CCD の評価や介入に役立つと思われる検査や課題、介入例を先行研究や著者の臨床経験をもとに紹介している。

原発性進行性失語 1311

高木 早希 氏ら

原発性進行性失語 (primary progressive aphasia : PPA) の概念は、アルツハイマー病 (Alzheimer's disease : AD) などの近時記憶障害を主症候とする変性疾患と区別され、言語症状のみが選択的に、他の認知症の症状より先行して進行する臨床症候群である。本稿では PPA の診断基準と臨床的特徴、鑑別点、言語リハビリテーションアプローチなどについて解説している。

失語症に対する TMS 治療とリハビリテーション 1321

原 貴敏 氏

脳卒中後失語症 (post stroke aphasia : PSA) に対する経頭蓋磁気刺激療法 (transcranial magnetic stimulation : TMS) は、ここ 10 年ほどで多くの論文が報告されている。PSA に対する rTMS は言語療法と併用することで、言語機能の改善を促す可能性が示唆されている。しかしながら、未だ確固たる結論に至っていない部分も多く、本稿では、あくまでも暫定的な内容であるが最新の報告をふまえて解説をしている。

脳損傷後の小児のコミュニケーション障害 1331

今井 裕弥子 氏

小児期に脳損傷によって、その発達が途絶されることはさまざまな困難さに繋がり、学習や社会参加の機会が失われることに繋がりがねない。急性期医療を担う病院では、先天的な言語発達障害を持つ子ども以外にも、脳損傷に起因する後天的な言語・コミュニケーション障害を持つ子どもたちへのリハビリテーション治療を行っている。本稿では、脳損傷後の言語・コミュニケーション障害に関して支援・指導の実際について解説している。

読み書き障害 1339

川崎 聡大 氏

読み書き障害など、学習面の苦手さを表す用語や関連する症候群は、読み書き困難、読み書き障害、学習障害、限局性学習症、ディスレクシア、ディスグラフィアと多岐にわたる。本稿では限局性学習症の多くを占めるディスレクシアの評価と支援を念頭に置きつつも、必ずしもそこに限定せずディスレクシアと非特異的な読み遅延 (non-specific reading delay : NSRD) を中核とする読み書き障害について、教育・医療双方の観点に発達の視点を加えて論じている。